Osaka University Knowledge Archive

Title	Writing toward the Other:Post-Postmodern Sincerity in the Novels of Paul Auster, Richard Powers, Toni Morrison, and Margaret Atwood
Author(s)	林, 日佳理
Citation	大阪大学, 2018, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/70710
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　林　日佳理　　）	
論文題名	Writing toward the Other: Post-Postmodern Sincerity in the Novels of Paul Auster, Richard Powers, Toni Morrison, and Margaret Atwood （他者に向けて書くこと：ポール・オースター、リチャード・パワーズ、トニ・モリスン、マーガレット・アトウッドの小説におけるポスト－ポストモダン・シンセリティ）

論文内容の要旨

本論文は、現代の北米作家Paul Auster、Richard Powers、Toni Morrison、Margaret Atwoodの小説作品を、「書く」という行為と、それが志向する「他者」という概念とのかかわりについて、ポスト－ポストモダニズムのNew Sincerityという観点を参照しながら、比較・検討するものである。1980年代以降のアメリカ・カナダで活躍したこれらの作家たちを、ポストモダニズムより後に見られる「sincerity」の再表出という風潮の先駆けであると見る立場から、その特徴が「書くことについて書く」というメタ的な視点として表れていること、さらに、書くことの宛先としてつねに「他者」を志向しているところに見られることを明らかにしようとするものである。

ポスト－ポストモダニズムという現代の英語圏文学の潮流を見るために、まずはその前身であるポストモダニズムとの関連を整理する必要がある。1960年代にアメリカで隆盛をきわめた実験的なポストモダニズム文学は、書かれている文章の虚構性をアイロニカルに露呈させるメタフィクションの技法を駆使していた。しかし、1980年代以降、ポストモダニズムが一つの「制度」になってしまい、そのアイロニカルなものの見方が時代遅れになっていることが指摘されるにつれて、モダニズム以前のリアリズム的な表象への回帰・再評価や、「sincerity」の概念が注目されるようになった。そのような流れの中心と目されるのが1962年生まれのアメリカ人作家David Foster Wallaceであり、彼は自分たちの世代を60年代の実験的なポストモダニストたちに対する反動として捉えている。Wallaceはこの反動的な世代を、父親世代のポストモダニストたちに置き去りにされた孤児という比喩で表しているが、実はWallace以前の、今まで後期ポストモダニストとされてきた北米作家たちの小説の中に、彼につながる「post-postmodern sincerity」の萌芽を読み取ることが出来るのではないか、という観点を本論文は提出する。その萌芽とは、Paul Auster、Richard Powers、Toni Morrison、Margaret Atwoodら1980年代から2000年代にかけて活躍した作家たちが、その前の世代（1960年代に活躍した実験的なポストモダニストたち）のメタフィクションの技法を換骨奪胎し、自らの「書くこと」により真摯に向き合おうとする態度に見ることが出来る。すなわち、前世代のポストモダニストたちにとっては作者や言語の透明性などに対する疑念やアイロニーの表明であったメタフィクションの技法が、ポスト－ポストモダニストたちにとっては書き手自身がみずからの「書くこと」についてよりsincereに向き合い、「他者」に向けた行為であることにより自覚的になっていることの表れへと変化している点に、アイロニーからシンセリティへの世代交代が表れていると考えられる。

それを検証するために、本論文では1980年代から活躍する四人の北米作家たちの小説作品の中に描かれている「書く行為」に注目し、それが小説全体の構成や、作者本人の「書くこと」への態度に直接的につながっていることを確認し、その行為の源泉であり宛先である「他者」との関係を構築するさまざまなやり方を詳細に見ていく。この四人の作家のアプローチ方法は、それぞれの出自や執筆の背景・理由によってさまざまに異なるが、その根底には共通して「他者」に向けて「書く」ことのsincerityがある。また、本論文が注目する四人の作家は、これまで同じカテゴリで考えられたことのない作家であり、特にアフリカ系アメリカ人女性作家であるToni Morrisonと、カナダ人女性作家であるMargaret Atwoodを考察の対象に含めているのは、これまで白人男性のアメリカ作家のみを中心的に論じてきたポストモダニズム文学批評に対して一石を投じようとするものである。さらに、「他者」という広範な概念をそれぞれの作家の出自と関連させて、確たる主体にとっての客体というだけでなく、自らがマジョリティから見れば「他者」とされるマイノリティであるという経験の意義を探るために、白人男性でない現代北米作家をも同等に扱うことの必要性を提案するものである。本論文は、これらの四人の作家を二つの軸によって対照的に論じる。一つ目の軸は、「マジョリティ－マイノリティ」の軸（自らが「他者」とされるマイノリティの視点を内在化しているか否か）であり、二つ目の軸は「異質性－同質性」の軸（「他者」を最終的に自らと同じものと考えるか、それともその異質性を強調するかの違い）である。この二つの軸が交わってできる四つの平面のそれぞれを、四人の作家のそれぞれが代表して

いると考え、彼らの「書くこと」の特徴を各章で詳述していく。

第一章はPaul Austerの小説作品に注目し、幾多の「書く」登場人物を生み出し操ってきたAusterの「書くこと」に対するこだわりを、手の届かないところにいる「他者」にそれでも届こうとする希求との関連において明らかにすることを目的とする。初期の*The New York Trilogy* (1987)から顕著であったこの「書くこと」へのこだわりは、Austerのキャリアの後期において再び前景化し、複数の作品に渡ってその考察が二転三転する。本章ではそうした後期作品のうち*Oracle Night* (2003)、*Travels in the Scriptorium* (2006)、*Man in the Dark* (2008)、*Invisible* (2009)を取り上げ、Austerの作者であることにまつわる葛藤が、書くことにつねにつきまとう「他者」との関係と不可分であることを論じる。その葛藤や変化は、*Oracle Night*における、「他者」をその到達不可能性 (unreachability) ゆえに否定してしまうという作家としてのジレンマが、*Travels in the Scriptorium*と*Man in the Dark*という二度の観念的な「自殺（未遂）」を経て、*Invisible*においては他者の到達不可能性をそのまま受け止め、異質なテクストとして物語内に抱え入れようとする姿勢へと変わっていることに見ることが出来る。このような「到達できない他者」という存在こそが、オースターの執筆を動機づける物語的装置である。

第二章はRichard Powersの小説作品に注目し、その中で頻繁に描かれる兄弟姉妹の関係が、より一般的な「他者」との共感的な関係を模索する実験場のような役割を果たしていることを、兄弟姉妹のキャラクターたちが行う集団的な「書くこと」を手がかりに考察する。Powersの作品の中で特に兄弟姉妹の関係が前面に扱われる*Prisoner's Dilemma* (1988)、*The Time of Our Singing* (2003)、*The Echo Maker* (2006)を対象に、それぞれの作品に登場する兄弟姉妹たちの関係が、現代アメリカ社会のさまざまな問題（例えば冷戦下の互いへの不信感、異なる人種間の対立、9.11以後の社会の非現実感など）における自己と他者の関係を反映したものであること、またそれらの解決方法として、他者との共感を可能にするような集団的な書きもの（例えば複数人によるまわし書きや、他者とのハーモニーを記述する楽譜、複数の書き手が想定される書き手不明のテクストなど）が提示されていることを論じる。このような、兄弟姉妹の関係にある登場人物たちが行う集団的な「書くこと」には共通して、個人の主観という檻から他者の感情へと飛び越える共感的な関係に対する信念が表れており、そのような姿勢に、ポストモダニズム的なアイロニーではなく、ポスト - ポストモダニズム的なsincerityを見ることが出来る。

第三章はToni Morrisonの小説作品に注目する。Morrisonの、これまで沈黙させられてきた黒人たちの声を聞こえるようにするために書くという第一信条を特に凝縮して反映している*Paradise* (1997)を中心に、作品内に描かれる三つの異なる種類の「書くこと」を比較しながら、「書くこと」には権力の問題がつきものであることと、その権力から自由であるようなオルタナティヴな「書くこと」の可能性への模索が表れていると論じる。肌の色に強く規定された共同体の中心にいる黒人の男たちの「書くこと」は、白か黒かをはっきりさせる二項対立的な考え方にしばられており、「他者」を排除しようとする力への意志に満ちているのに対し、その共同体の中でよそ者扱いされる女性の「書くこと」は、排除される者の側からの視点で同じような存在の消された声を見つけようと努めるが、それを公に聞き届けられるようにするまでには至らない。さらに共同体の外にいる、よそ者の女たちの集団は奇抜な方法で――すなわち床に身体の型を描きその内部を彩り、トラウマを物語として昇華するという方法で――自らの身体という枠を超えて他者の中に踏み込んでゆけるという「書くこと」のオルタナティヴな方法を示していると解釈できる。このようなオルタナティヴな「書くこと」こそ、Morrisonの今まで「他者」として沈黙を強いられてきた立場から声を上げるという本来の執筆動機を現実化するsincereな姿勢である。

第四章はMargaret Atwoodの小説作品に注目し、アメリカの「他者」としてのカナダから、Morrisonとは異なる方法で声を上げるための「書くこと」の特徴を、「離れていること」として考察する。2000年の小説*The Blind Assassin*はAtwoodのキャリアにおいて「書くこと」と「離れていること」との関連を探るうえで最重要な作品であり、本章では本小説における「切断」のモチーフを手がかりに、物語内のキャラクターの書く行為と、作者Atwoodの創作行為を関連づけて考察する。「切断」というテーマは、カナダという地理的な分断を暗示するばかりでなく、Atwoodの書く行為そのものの本質を示すものであることを、小説中に登場する切断された書く手のモチーフや、現実から切り離された異次元の物語として挿入されるサイエンス・フィクションなどを分析することによって導き出す。それらのことから、Atwoodにおいて特徴的な「切断」は、切り離した部分を永久に捨て去るのではなく、切断したものがまとわりつき、くりかえし語りの表面に上ることから、これまで公に語られなかった真実を別の形で存在させる方途であり、辺境で書くAtwoodに特有の、「切り離すことによってつなげる」という逆説的な存在表明の仕方である。

これらのことから本論文が結論として主張するのは、さまざまに異なるこれらの作者たちの「書くこと」の源泉には、つねに「他者」という対象にsincereに向き合い届こうとする姿勢が共通してあり、その点において前世代のアイロニカルなポストモダニストたちとは一線を画しているということである。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　林　日佳理　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	片 渕　悦 久
	副 査	大阪大学　教授	服 部　典 之
	副 査	大阪大学　准教授	山 田　雄 三
	副 査	大阪大学　准教授	石 割　隆 喜
	副 査	大阪大学　准教授	森 本　道 孝

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　Writing toward the Other: Post-Postmodern Sincerity in the Novels of Paul Auster, Richard Powers, Toni Morrison, and Margaret Atwood

学位申請者　林　日佳理

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	片渕　悦久
副査	大阪大学教授	服部　典之
副査	大阪大学准教授	山田　雄三
副査	大阪大学准教授	石割　隆喜
副査	大阪大学准教授	森本　道孝

【論文内容の要旨】

本論文は1980年代以降のアメリカおよびカナダで活動する４人の作家、ポール・オースター、リチャード・パワーズ、トニ・モリスン、マーガレット・アトウッドの小説作品を、「書く」行為と、それが志向する「他者」という概念とのかかわりに注目し、「ニュー・シンセリティ」(New Sincerity)を土台とした創作意識のあり方をとおして比較・検討することで新たな読みを提示しようとする試みである。論文は英語で執筆され、序論、全４章からなる本論、および結論から構成されている。論文の分量は、後注と参考文献リストを含め全体でA4判161ページ、図表等を除く本文の語数は約38,000語である。

序論は先行研究をたどりながら、主題的関心や表現手法の差異にもかかわらず、４人の作家たちが「書くこと」に真摯に向き合おうとする物語意識を共有していると指摘する。とりわけ彼らが駆使するメタフィクションの手法が、現実表象の客観性への疑念やアイロニー的言語遊戯ではなく、「書くこと」へ「誠実」に向き合おうとする創作態度として機能している点に着目し、4作家が次世代のポスト・ポストモダニズム文学の根底にある「誠実さ」を先取りしていること、またそうした共通性ゆえに際立つ差異が現代北米文学の全体像を理解する手がかりともなると主張する。

第１章はポール・オースターの小説に注目し、「書くこと」に対するこだわりが、到達不可能な「他者」との意思疎通を希求する作家の真摯な創作態度の土台となっていると指摘する。オースターにとって小説とは、書くことと「他者」との関係のなかで必然的に生まれる創作行為にほかならず、到達不可能な他者への複雑で屈折した意識が、最終的には異質な他者を対話的に取り込み融合させるという肯定的な物語へと転化していると結論づける。

第２章は、リチャード・パワーズの小説で頻繁に描かれる兄弟姉妹の関係が、自己と他者との共感のあり方を模索する物語的実験場となっている点に注目し、作中人物による集団的な「書く」行為と共感の問題に対する物語的表現のありようについて考察を進める。パワーズの物語世界では、自己と他者の関係性が社会的問題を置き換

える普遍性を帯びたものとして提示されており、まわし書きや、楽譜、複数の書き手による文書など、他者との共感を促すこうした集団的行為が緊張した人間関係を和解へ導く物語的装置として前景化されていると主張する。

第3章はトニ・モリスンの『パラダイス』を主に取り上げ、沈黙を強いられてきたアフリカ系の作中人物が「書くこと」につきまとう権力の問題から自由な意思疎通の方法を模索する姿を一貫して描いていると指摘する。とりわけ共同体から排除された者の側からの視点から社会の周縁に追いやられた女性集団が、床に身体の型を描きその内部を彩ることで、自らのトラウマを物語として昇華する点に着目し、身体の枠を超えた他者との融合を表す「書くこと」の実践がモリスン独自の文学的想像力の表れであると結論づける。

第4章は、マーガレット・アトウッドの『ブラインド・アサシン』にみられる「切断」のモチーフを、作中人物による書く行為や作者の創作行為と関連づけて考察する。アトウッド文学における「切断」は、カナダという地理的な分断を暗示するばかりでなく、現実を切り取るという書く行為そのものの本質でもあることを、物語中で象徴的に描かれる書く手の切断というエピソードや、現実から切り離された異次元の物語として挿入されるサイエンス・フィクションの言説的効果などとの関係をふまえた詳細な分析も交えて解明する。

結論では、本論文全体の企図がまとめられ、さまざまに異なるこれらの作者たちの「書くこと」の源泉にはつねに「他者」という対象に「誠実に」向き合う創作姿勢があると主張される。こうした物語意識は前世代のポストモダニストたちのそれとは一線を画すものであり、同時に後に続くポスト・ポストモダニズムへの移行期における彼らの文学的特質を表していると結論づけられ、これにもとづき序論で提示された現代北米文学の全体像と4人の作家の文学的方向性の関係性が再確認される。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、現代アメリカおよびカナダ文学を代表する作家4人の比較研究であり、ポストモダニズムからポスト・ポストモダニズムへの移行期である1980年代から2000年代までを射程に入れた現代北米文学史論とも呼べるその考察に独創性を認めることができる。とりわけオースター、パワーズ、モリスン、アトウッドといった一見共通性を見出しにくい4作家の駆使するメタフィクション的手法が、ポスト・ポストモダニズム的なアイロニーではなく、肯定的な「他者」志向の「誠実さ」を前面に出す創作態度として、それぞれの文学的想像力を同定する分析は明快である。ポストモダニストが提示した現実表象の不可能性に対して、「新たな誠実さ」を土台に新たな文学表象のあり方を模索するポスト・ポストモダニズムの文学を先取りする4作家の文学的特質にみられる共通性と差異を丹念に粘り強く探る考察は、現代北米文学研究および英米文学研究全体に新たな視座と方向性を提供するものであり大いに評価できる。

ただし、本論文において問題点がないわけではない。「誠実さ」の定義に柔軟性をもたせ、4作家がもつそれぞれ異なったメタフィクション的物語意識を包摂する概念とした点は、作品分析に一貫性を担保する論述的戦略であると理解できるが、それが却って鍵概念の拡大解釈を誘発し、結果としてポストモダニズムからポスト・ポストモダニズムへの過渡期的文学状況の多様性が見えにくくなっている。こうした点へのさらなる考察の深化があれば、4作家が共有する文学的特質と現代北米文学の全体像との関係性がより明確に提示できたであろう。

しかし、これらの点は本論文の本質的価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。